

附属図書館 門 田 泰 典

大学図書館の改善、改革の問題を歴史的にみれば、戦後、新制大学発足前後から、大学図書館基準、国立大学図書館改善要項、司書職制度、大学図書館の近代化の運動、等主として法制面での運動が展開され、一定の成果を収めてきたが、今日なお、大学図書館の状態は一向に好転する様子がみられない。過去20年間に大学図書館は発展的成長を遂げたというよりも、非体系的・果積的衰退に至ったと思える現状である。

この間、図書館の使命、役割、機能、あり方等は、法制面で明文化され、外形は整えられたが、その実質化の面では、整理、サービスの両面で、質よりも量をこなす図書館活動を継続し、その実質は、空洞化し、核のない把えどころのない組織体となってきたと考える。

このような事態に至らしめた原因を図書館行政の貧困に求め、さらに、思考・行動を開始することも重要なことであるが、これと同等に重要と思われる問題についての反省が先行しなければならないと考える。

それは、現場を担当する専門的図書館員として、整理・サービス両面で、如何なる行政的・財政的条件におかれても、われわれの専門的業務の実質だけは、利用者に対して、これを一貫して、護り通せるような形での専門的業務の展開、確立に努めてきたかという問題である。

この疑問を発するとき、われわれの取りかからなければならない事柄は数多くあるように思う。その中でも特に、利用者の潜在的、顕在的要求との関係において、われわれの図書館内部の実体を、ダイナミックに、科学的に把握しこれを再構成することが最も緊急を要するものであると考える。われわれの出力する諸サービスが、どのように利用者の要求と結びついているか、その量は、その質はどうか、新たに必要なものは、また、不要な部分は何かを明確にしてゆくことが必要である。

このような手続を経て、今日の大学図書館の貧困の責任について、大学社会全体の部分と、図書館側の部分を明確にしてゆくことが正しい大学図書館の実質化、また専門的業務の実質化への道ではないかと考える。

文 学 部 山 田 忠 彦

現代のように細分化された学問に対応するために大学図書館の業務内容も複雑化し、専門化せざるを得ない。図書館職員も既存の知識だけでなく、社会変化に応じた新しい知識・教養が要求されてくる。技術的なものだけでなく図書館の真の役割は何か、館員はなにをなすべきか等々の理論的なものもぜひ各自が持ち、生かしていかなければならない。そこで館員としての研修はいつの時にも必要となってくるが、京大の現状と照らし合わせて内部研修の確立について書いてみたい。

勤務時間内に目録法とか語学の勉強をしたい、書誌学的なものを学びたい、図書館学の理論を身につけたい、図書館員のあり方について考えたい等々、すべて業務に役立てたいということを前提にして図書館員は希望を持っている。しかし京大では仕事量の増大・人員不足等が重なり、日常業務に追われ、また、職員が自主的に学習する権利が確立されていないため、館員の希望にもとづく自主的研修がかなえられているのはほんの一部分でしかない。そのために研修は時間外に館員の自己負担（経費をも含めて）で行なわれており、大学図書館としては全く消極的である。東大農学部図書館では学生の授業を館員各自でカリキュラムを組み聴講でき、また、特殊語学は特別に講習が行なわれており、他大学数校でもそれに似た

制度があると聞く。図書館員が学問的知識を身につけて、それを業務に還元するという意味において、わが京大でもぜひこの方法の有効性が認識され、明確に位置づけられることを要望したい。

次にわれわれ館員が自からの所属する館のみならず、全般的な図書館問題について研修し討論する機会がもてるようにぜひ全学的に保障されなければならない。現状では有志が自主的に勤務後夜遅くまで討議し、図書館理論を身につけようとしているが、全館員が話し合い理論を実践に結びつけていく必要がある。図書館員のサラリーマン化がいわれて久しいが、館員自身の側にも自からの職業を研究しようという意欲の稀薄な例があるのは残念である。しかし、改善すべきところは改善し、図書館運営を民主的にすすめていく、という点についての姿勢が大学側にあまりみられないのではなかろうか。もちろん研修討論は自由な立場ででき、どこからも圧力のかからないものであることが最低条件である。業務の兼ね合いもあるがせめて1カ月1日館内整理、館員会議を目的とした休館日をもうけ、その中で館員全員が研修時間を持てるように、というのは虫のよすぎる願いであらうか。

利用者に対する奉仕がよりの確に迅速に行なわれるためにもその裏付となる自主的内部研修が1日も早く保障されるように要望しペンを置きたい。

経済学部 調査資料室 桜田 忠 衛

図書関係の業務に従事している者として、毎日の仕事のなかで感じていることを二・三あげたい。この雑文で図書職員の実情に御理解いただければ幸いである。私は経済学部にも所属しているので具体的には経済学部での現状をあげるが、他の学部においてもそんなに大きく変わるところはないだろう。

まず、私の考える「図書職員」像を描いてみたい。最近、学問は各分野で専門化し、細分化がすすんでいる。このことは図書館の分野においても新しい領域の拡大を強制する。経済関係の図書でも、特に近代経済学といわれる分野においては私たちがきいたこともないような言葉がひんばんに出てくる。私たち図書職員がこれら学問の専門化とそれにとまなう細分化に正しく対処していくのには、なによりも研修が必要であり、専門的知識を身につけることが要請されてくる。図書・資料等の文献情報部門を担当して、大学内における共同研究にも積極的に参加しようとするならば、研修や専門的知識は一層必要となるだろう。（共同研究へのドキュメンタリストの参加の問題に関しては、細川元雄「特殊文献目録編集に関する問題点——ヒルファディング文献目録編集に関連して——」『経済資料研究』No. 3, 1970, 9に展開されている。）私は大学における共同研究体制こそが本来あるべき研究体制と思うので、そこから導き出される図書系職員の本来あるべき姿も以上のように共同研究体制への積極的参加に求められる。

ここで現実を目をむけてみよう。そこでは図書職員は決して共同研究の一部門を担当するというような精神的労働には従事していない。夏はむし暑く、冬は寒い、暗いほこりばい書庫の中で右往左往しているのである。また経済学部では書庫が6カ所に散在しているためそれに要する労力・時間も相当なものである。加えて仕事量は増大する一方なのに（貸出冊数だけをとっても昭36に1日平均17.1冊だったのが昭43には1日平均30.8冊になっている）それに比例しての人員は増えない。また、図書や資料も他の物品同様に「物品管理法」の適用をうけるため、図書事務が繁雑化している。このことも図書・資料の整理において大きな障害となっている。

以上のように京大における図書職員というのは決して私たちが望むようなかたちでの精神的労働者ではなくして、最も過酷な条件のもとにおかれた肉体的労働者なのだ。定員外職員